
東京電力と協力企業が一体となった 災害の未然防止活動について

～ヒヤリハット情報などを収集・分析する仕組みの構築～

【進捗報告】

2015年11月20日
原子力・立地本部

現在までの取り組み

■ヒヤリハット情報の収集（第2四半期）

当社社員による収集件数：約 210件（第1四半期時：約110件）

協力企業による収集件数：約2800件（第1四半期時：約3500件）

■現場の行動観察による情報収集（第2四半期）

収集件数：約2450件（第1四半期時：約720件）

実施回数：約1200回

9月時点、当社の管理職が平均約1.2回/月の現場観察を実施中



「現場の行動観察」教育風景（KK）10/1



現場の行動観察実施状況（KK）10/1

取り組みの課題、改善の方向性

活動の更なる推進のために、以下の改善を引き続き実行していく

【前回課題1】

ヒヤリハット情報の収集活動や効果的な分析が、まだ十分に出来ていない

<改善>

- ・ヒヤリハットの重要性について、当社及び協力企業に説明する活動実施中
⇒協力企業合同会議8/28（企業8社）、東電原子力品質保証情報連絡会9/24（企業18社）
- ・ヒヤリハットや現場の行動観察情報について試行的に分析実施
⇒今後、分析範囲を拡大すると共に効果的かつ共通的な分析手法を策定していく

【前回課題2】

当社管理職による現場の行動観察が、まだ十分な効果を発揮しておらず「不安全行為」を的確に抽出するための知識と訓練が不足している

<改善>

- ・行動観察力を高めるため、WANO専門家による当社管理職の教育・訓練を実施中
⇒約260名の管理職が受講済（本社88名、KK57名、1F93名、2F22名）
⇒新たに、海外エキスパートによるCFAM※分野毎の専門コーチングを受け、分野毎の観察基準を策定し、これらに基づく観察を実行していく

分析結果(ヒヤリハットの例)

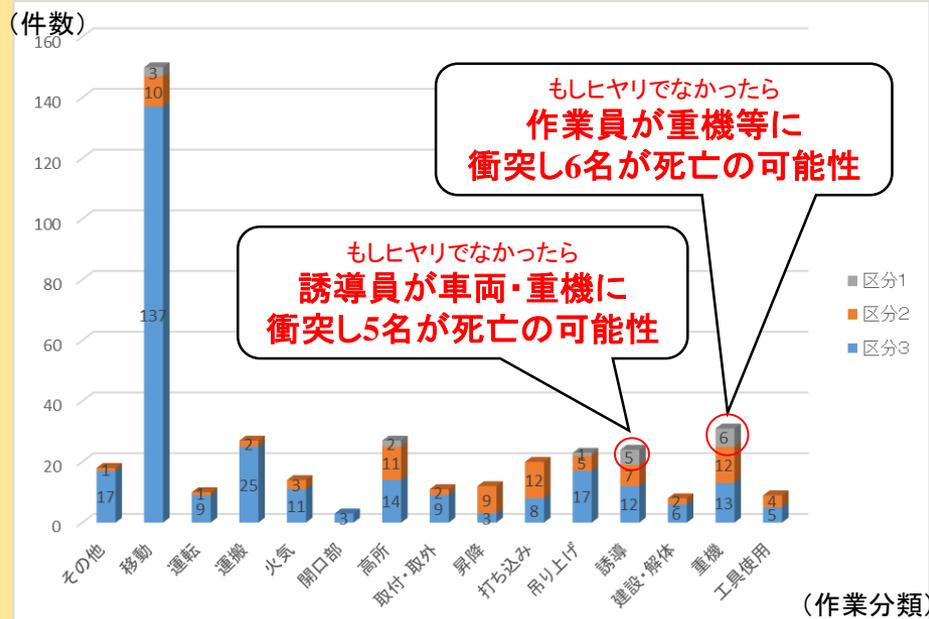
分析手法:ヒヤリハットの事象を動かし(もしヒヤリでなかった際)、どの程度の重大な災害になっていたか分類し、重要度に応じた分析を実施

A社情報の分析例

情報内容:1F
情報収集期間:H27/3~5月、情報数:387件

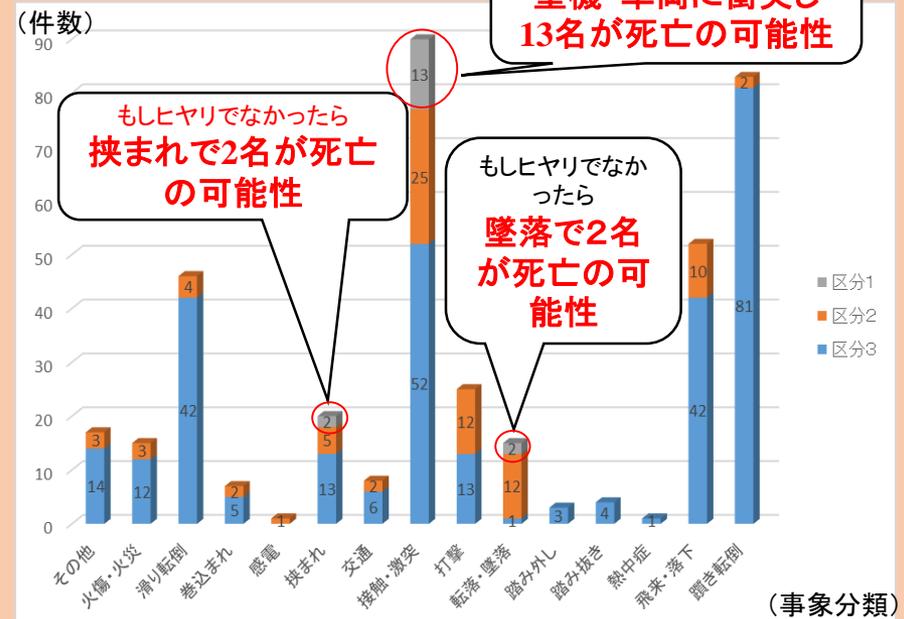
区分1:死亡災害に至る可能性のある情報
区分2:区分1に満たない情報
区分3:擦り傷等、軽傷な災害に至る可能性の情報

【区分×作業分類】



- ・移動は150件と多く、区分3の割合が大半を占める
区分1, 2の割合は小さい⇒赤チン災害
- ・高所、誘導、重機の作業は20件程度であるが、区分1, 2の割合が大きい
→死亡災害に至りやすい

【区分×事象分類】



- ・躓き転倒は83件と多いが、区分3が大半を占める
- ・接触・激突は90件と多く、区分1, 2も多い
→死亡災害に至りやすい
- ・転落・墜落は15件と少ないが、区分1, 2は多い
→死亡災害に至りやすい